

佐藤一斎『言志録』のモチーフ 「知言」と「立志」

近藤 正則

文学部文化情報メディア学科書法メディア専攻

(二〇〇三年九月十一日受理)

The Motif of “Genshiroku (言志録)” by Sato Issai (佐藤一斎) ‘Chigen (知言)’ and ‘Rissshi (立志)’

Faculty of Humanities, Department of Humanities and Information,

Major in Calligraphy and Information

KONDO Masanori

(Received September 11, 2003)

佐藤一斎の『言志録』及び「言志四録」の書名について、岩波文庫『言志四録』(昭和十年六月刊、山田準・五訂安一郎訳注)の「解題」は、次のように記している。

言志四録は、佐藤一斎先生の語録である。論語公冶長篇に、「顔淵・季路侍。子曰。盍言其志也。」とあり、先進篇にも、「子路・曾皙・公西華侍坐。云々。亦言其志也。」とあるのは、恐らく此の書の由りて来る所であらう。

右の文に引用する『論語』の文言に、若干の文字の異同が認められるものの、先行の一斎研究の専著として著名な高瀬代次郎著『佐藤一斎とその門人』(大正十一年十一月刊)も、基本的に同様の見解を示し、近年刊行の明德出版社『佐藤一斎全集』(第十一卷)平成三年十一

月刊)の「言志四録」解題も同じく、前説を踏襲して、書名の由来を『論語』中の二章に見える「言其志」の文言に求めている。

いわば、これが『言志録』並びに「言志四録」の解題としての定見とされる所である。

しかし、「言志」という表現を「言志四録」に求めてみると、例えば、『言志後録』第二百八条に、

詩在言志。如離騷・陶詩、尤能言其志。今之詩人、詩与志背馳。如之何。

詩は志を言ふに在り。離騷・陶詩の如き、尤も能く其の志を言ふ。今の詩人、詩と志と背馳す。之を如何せん。

詩の目的は、志を言葉に載せて表現する点にある。屈原の離

騷」や陶淵明の詩などは、もつともよく志を述べたものと言える。ところが、近頃の詩人たちの作品は、表現の技巧に走って、志に背を向けたものばかりである。どうにもいたしかたがない。

とあり、また、『言志晩録』第五十一条には

文能意達、詩能言志。如此而已。綺語麗辭、比之佞口。吾曹所不屑焉。

文能く意を達し、詩能く志を言ひ。此の如きのみ。綺語麗辭は、之を佞口に比す。吾が曹、屑しとせざる所なり。

詞文は十分意見を伝えることができるということ、詩歌は十分に志を述べることができるといふこと。ただこれだけである。美辭麗句を並べて、うわべを飾ることなどは、口先だけの媚び諂いの徒の虚偽・妄言に類する。吾等のような字に志す者のいさぎよしとせぬ所である。

とあるように、「詩」の要訣として、「志を言う」という語を用いるのが普通である。『佐藤一斎と其門人』にも引用するが、『書経』虞書・舜典に、

詩言志、歌永言。

詩は志を言ひ、歌は言を永す。

詩は物に感じて心が動き、志となったものを言葉に現わし、

歌はその言葉を声をながくひいて詠ずるものである。

とある。また、『詩経』の毛詩大序にも、

詩者志之所之也。在心為志、發言為詩。

詩とは、志の之く所なり。心に在るを志と為し、言に発するを詩と為す。

詩とは、物に感じて心に動きが生じ、心の外に向かつて表出したものである。感動が心の中にある段階が志であり、言葉になって表現されたものが詩である。

という、東洋の伝統的文学理念を提示した一節があつて、これらが典拠となつて、一般に「言志」とは、詩の理念を述べた言葉として用いられるのである。前掲の『言志後録』の用例もまた、詩の理念を述べたものである。

こうして見ると、『言志四録』の内容に照らせば、『書経』や『詩経』に見られる、一般的な「言志」の用法が、ただちに書名の由来とは言えず、いきおい、その典拠を『論語』に求めた結果が、諸説の解題が軌を一にした理由と考えられる。しかしそれも、『論語』の文脈に従えば、孔子は、「諸君、思う所の抱負を言ってみたまえ」と語つただけであつて、「思いを述べる」ということだけでは、やはり『言志録』及び後続三書の書名の由来としては、いささか軽きに過ぎるような印象を免れない。

これは、「言志」を「言志」と見る先入主によるからである。そこで、古典の一節をそのまま書名としたと見ず、「言・志」とに分けて見るとどうなるであろうか。

『孟子』公孫丑章句上第二章は、「不動心」章とか「浩然」章とか言われ、『孟子』の中で、最も長文の一章である。この一章に、孟子の不動心の工夫として、「持其志（其の志を持す）」と、「我知言（我れ言を知る）」の文言が、並び説かれている。一章の要旨は次のようなものである。

孟子が斉の国に滞在した時の対話のようで、斉人の門人公孫丑が、「先生のような方が、斉国の大臣の位を得て聖賢の

道を行えば、斉王を覇者にも王者にもなし得ることは疑いなし所です。しかし、そうなれば「一学士たる今と違って、何かとひるんだり動揺したりすることも有りましよう」と問う。

孟子は、「我、四十より不動心」として、不動心の修養について、刺客の北宮黶と百戦の勇士孟施舍の養勇の工夫を述べ、北宮黶に似た子夏と孟施舍に似た曾子の「勇」に言及する。孟子は、最終的に曾子の

自反而不縮、雖褐寬博吾不慄焉。自反而縮、雖千萬人吾往矣。

自ら反りて縮からずんば、褐寬博と雖も、吾慄れざらんや。自ら反りて縮くんば、千万人と雖も、吾往かん。

自己を省み公正実直でない所があれば、たとえ相手がだぶだぶのボロ着姿の賤しい者であっても恐れ入らずにはいない。しかし、自ら省みて正直であれば、たとえ相手が千万人でも、私は畏れず吾が道を往くであらう。

という養勇の工夫の「守約(要点をしっかりと押さえて、確実に我がものとしていること)に優るものはないとする。

以下、引き続き、公孫丑の求めに応じ、孟子は自らの不動心の要点について説く。それは、次のような事項である。

志は気の帥であり、気は体の充である。ゆえに、志を堅持して、気を暴つてはならない。

そのために、言を知り、浩然の気を養う。

至大至剛の浩然の気を、正しい方法によって養い害することがなければ、我が精気は天地の間に充滿し、天地の真

理と、人の道である義が一体化することになる。これは、「集義」の工夫を積み重ねて可能になる。

浩然の気を養うには、

- i. 常に「集義」に専心する。
- ii. 結果を預期し、それをあてにして行うようではない。
- iii. 己の為すべき事を忘れない。
- iv. 不本意な結果を助長してはならない。

義はもとも吾が心に備わっている資質である。これを養成・拡充することが「集義」である。

「知言」とは物事の真実を知ること、その結果、人の諛辞(偏向した言葉)・淫辞(みだらでじめのない言葉)・邪辞(よこしまで悪意のある言葉)・遁辞(言い逃れ)を見極めることができる。

以上の養気・集義・知言の工夫によって、志を堅持し、不動心が可能となる。

というように要約される。

次に、『孟子』の本文では前後している「言・志」について検討してみる。

先ず「知言」とは、心の能力をフルに發揮し、自己の本善の性を知り、様々な事象の真理を見極め、物事の是非・得失のより来る必然性を認識できること、という意味である。

『論語』の大尾にあたる堯曰篇第三章にも、

不知命、無以為君子也。不知礼、無以立也。不知言、無以知人也。命を知らざれば、以て君子為ること無きなり。礼を知らざれば、

以て立つこと無きなり。言を知らざれば、以て人を知ること無きなり。

という孔子の語が見える。ここでの「知言」は、文字通り、人の語る言葉の真贋を見極めることを意味しているが、幅広い知識と教養の積み重ねである「集義」の工夫が、その前提になっていると言つてよい。いわば、天地宇宙の真理と人事人語の真実とを見極めるための、士君子たる者の学問存養が、「知言」ということである。

次に、「其の志を持す」について。「志は、之（ゆ）く」と「心」からなる会意形声字である。心が事物に接して感応し、意志として、ひとつの方向性をもって動くことである。心の発露は、気を媒介とする。孟子が「志は気の帥なり」というのは、心が身の主宰であるように、喜怒哀楽といった情（気の働き）を、常に得た中正の状態に維持するものが、志だからである。しかし、時には私心私情という偏りのある情動が、公正な志を昏ませ、私的情動を形成する気が、逆に心を動かしかねない。そこで、「其の志を持し、其の気を暴ふこと無かれ」ということになる。志を堅固にして、生命の源といふべき浩然の気を損なうことがないようにして、気の動顛を未然におさえるのである。孟子が公孫丑章句上第二章で、「浩然の気」を是集義所生者、非義襲而取之也。

是れ集義の生ず所の者、義の襲ひて之れを取るには非ざるなり。

この浩然の気は、集義によって生じるもので、一時的に義を何処からかもつてきて行くことで得られるものではない。

と説明している点からすれば、集義・知言の修養によって浩然の気を養つことができ、養気の工夫が、適正な志を持する手立てに他ならない、ということになるのである。

『孟子欄外書』に、一斎は、

志気、本末也。持其志、無暴其気者、言本末交養也。姚江謂、持其志則養氣在其中。無暴其氣則亦持其志矣。（中略）据此、雖本文分説志気、而其実本末一物。持志亦是養気。

志気は、本末なり。「其の志を持し、其の気を暴ふこと無かれ」とは、本末交（こ）も養心を言ふなり。姚江謂ふ、其の志を持すれば、則ち養気其の中に在り、其の気を暴ふ無ければ、則ち其の志を持す、「中略」と。此れに据れば、本文は志気を分説すと雖も、而れども其の実は本末は一物なり。志を持するも亦是れ養気なり。

志と気は、本末の関係にある。『孟子』に言う「其の志を持し、其の気を暴ふこと無かれ」とは、本末両様相俟つて養うべきことを言つたものである。王陽明の『伝習録』に、「志を持すれば、養気の工夫はその中にある。気を暴つことが無ければ、また志を持することになるのである、……」とある。この説によれば、『孟子』の本文では志と気を分けて論じているが、その実質としては、本（志）末（気）は一体の物であり、志を持することは、すなわち気を養うということになる。

と述べている。『孟子』公孫丑章句上第二章の該箇所は、論敵告子の不動心の秘訣「言に得ざれば、心に求むる勿れ（得心のいかぬ事や十分な理解ができない事については、その事を棚上げして、自らの心を内省し理を探究するような事をしてはならない）」を、孟子が論駁することを主要目的としている。孟子に矢継ぎ早に質問をする公孫丑の関心は、不動心あるいは養勇という点に集中している。おそろしく、公孫丑は

斉の家臣であり、文武兼備の勇士たらんとしていたのかもしれない。孟子は、告子より優越する自らの不動心の根本の相違として、「我言を知る。我善く吾が浩然の気を養ふ」浩然の気は、集義の生ず所の者」として、持論を展開する。そして、一斎の解釈によれば、志を持つことは、浩然の気を養うことに他ならないことになるのである。

ここで一斎の助けを借りると、『言志書録』第二十二条に、
立志立字、兼豎立標置不動三義。

立志の立字、豎立・標置・不動三義を兼ね。

立志という言葉の「立」という文字には、豎立・標置・不動という三つの意味が包摂されている。

とあって、『孟子』の「持志」が、即ち「立志」の意味であることが分かる。語中の「豎立」とは、真つ直ぐに立つこと、「標置」とは、誰の目にも明らかかなように顕わす意である。志を真つ直ぐに、明瞭に、どんなことにも揺るぎないように立てることが、「立志」という言葉の意味である。

このように、『言志録』の書名について、「言志」ではなく「言」と志」として見た場合、解題は「志を述べた語録」ではなくて、「知言(集義)と立志(養気)についての随想録」ということになるのである。知言・集義とは、学問存養ということであり、その成果として、天の理と人の道とを我が物として、天地宇宙の真理と一体化することが、養気・立志ということである。

ただし、留意しなければならないのは、一斎は、学問存養という第一段階を終了して、始めて立志という次の段階に到達できるというように、段階論的には考えていない点である。飽くまで、学問存

養と立志は、表裏一体であり同時展開であることが、一斎の一斎たる所以なのである。

「言志四録」は、佐藤一斎が四十二歳から八十二歳までの四十年間に、おりにふれて書き綴った随想録であり、箴言集である。一斎終生の博識と含蓄の集成であり、箴言各条に言及するテーマも多岐にわたっている。従って、別存を含む全千七百七十七条をひと括りにして、「言志四録」の主題を論じることは不可能に近い。ただ、四録は全て一斎の生前に刊行され、門人・学徒の座右の書として通行したこと、例えば、『言志録』が刊行された四年後の文政十一年に、続編『言志後録』を起稿しているように、四録の執筆が、既刊の受容を見て行われていることを勘案すると、後進の啓蒙といった著作意図が想定されてもよい筈である。

『言志録』第九十九条・百七十八条に、学問存養の綱領が示されている。

性同而質異。質異、教之所由設也。性同、教之所由立也。(九十九条)

性同じふして質異なる。質の異り、教の由り設くる所なり。性同じ、教の由り立つ所なり。

人の本然の性は、皆同じであるが、個人的な資質が異なっている。ひとり一人の資質が異なっている点で、聖人の教えが作られた理由である。人の本然の性が同一であること、これが聖人の教えが成り立つ根源である。

為邦之道、不出於教養二途。教、乾道也。父道也。養、坤道也。母道也。(百七十八条)

邦を為むるの道、教養の二途に出でず。教は、乾道なり。父道

なり。養は、坤道なり。母道なり。

治国平天下の道は、「教」と「養」の二つの手立て以外に無い。教育は、乾道つまり太陽の恵みのようなものであり、人間に譬えれば、父親の薫陶にあたる。存養は、坤道つまり大地の慈しみのようなものであり、母親の愛育に相当する。

更に、『言志録』第二十八条の

為学之効、在変化氣質。其功不外於立志。

学を為す効は、氣質を変化するに在り。其の功は立志に外ならず。

学問を修めた効果は、ひとり一人の生まれつきの氣質を変化させ、公正でかたよりのない人格を形成する点にある。そのための手立ては、志を立てるということに尽きる。

という語を補足すれば、学問（知言）と存養（立志）が、万人共通の「本然の性善」を前提として、生来の氣質の偏りを補正し、真の士君子たるべき修養の手立てであることが明瞭になる。学問の効用によつて、人は自分が生まれた時に与えられた資質を改善することができる。その学問の実践において肝要なことは、「立志」に力を注ぎ努力することに他ならないのである。

前掲の『言志録』第七十八条で、「邦を為むるの道、教養の二途に出でず」というのは、『大学』三綱領・八条目に提示される、個人が自己の学問の規模を「齊家・治国・平天下」に定めることを踏まえた文言である。『大学』の「新民」格物「致知」の解釈をめぐっては、陽明学派の朱子学批判の発端の所在として知られるが、学問存養の目標値については、どちらの場合でも同じである。

『言志録』の第四条に、

孔子之学、自修己以敬、至於安百姓、只是実事実学。

孔子の学は、己を修して以て敬するより、百姓を安んずるに至るまで、只だ是れ実事実学。

我が孔子の学問は、己の修養に励んで心身を引き締める努力から始まって、生きとし生ける者の生活を安らぐことに至るまで、どれも実質の学ばかりである。

とあるように、個々人の修養が国家社会の善化を意味しなければならぬ。従つて、邦国の治世・経世済民は、ひとえにひとり一人の「教養」に根ざすのである。

「知言・集義」は、「博学・審問・慎思・明辨・德行」(中庸 第二十章)の営為である。一斎は学問によつて一層の理知的資質を得ることを「教」と言い、その成果を培育拡充するのを「養」とした。「養」とは「立志・養気」のことであり、学問のスケールを定め、更に確固たるものとして維持・拡充する工夫でもある。

『言志録』第十二・十三条に、学問の方法である「読書」についての指摘がある。

以三代以上意思、読三代以上文字。(第十二条)

三代以上の意思を以て、三代以上の書を読む。

夏・殷・周の聖賢の心で、夏・殷・周の典籍を読むのである。為学、故読書。

学を為す。故に書を読む。(第十三条)

学問をする。だから書物を読むのである。読書しただけであれば、学問をしたことにはならない。

更に、第六十条にも次のように見える。

古人読経以養其心、離経以辨其志、則不独読経為学、而離経亦是

学。

古人經を読み以て其の心を養ひ、經を離れ以て其の志を辨ずれば、則ち独り經を読むを学と為すのみならずして、經を離るるも亦是れ学なり。

学に志した先人たちは、經書を読んでその心を存養し、經書を離れた所で自分の志の是非を明辨したものである。經書を読むことが学問であるだけでなく、經書を離れた工夫もまた学問なのである。

一齋は、書物に基軸を置いた学問を否定はしていない。ただ、「学んで思はざれば則ち罔し。思ひて学ばざれば則ち殆し。」^{『論語』為政篇}の視点から、単なる博聞強記・博物洽聞を学問と取り違えた風潮に、一石を投じているのである。

前掲の『論語』為政篇「学而」章について、『論語欄外書』で一齋は、「餘姚、説あり。参看すべし」と記し、学と思を両事に非ずとする王陽明の理解の方法を支持している。博学・審問・慎思・明辨・徳行を一貫のこととするのが、一齋の学問観の基本であるから、「学」と「思」は、不可分一体でなければならぬのである。『言志録』第三十二条に、

緊立此志以求之、雖搬薪運水、亦是学所在。況讀書窮理乎。志之弗立、終日從事讀書、亦唯是閑事耳。故為学莫尚於立志。

緊しく此の志を立て以て之れを求むる、薪を搬び水を運ぶと雖も、亦是れ学の在る所なり。況て書を讀み、理を窮むるをや。志の立たざる、終日讀書に従事するも、亦唯だ是れ閑事ののみ。故に学を為すは立志より尚なるなし。

自分に厳格に学問の志を立て、真実を求めていけば、たとえ

薪や水を運搬するような力仕事をしていても、真の学問はそこに存在するのである。まして、机に向かつて書物を読み、ものの道理を探究するような場面では言つまでもない。志が立たなければ、いくら一日中讀書に勉めても、それはただの手慰み、二の次の仕事に過ぎないだけである。だから、学問を修めるのは、氣宇壮大な志を立てるといふことより重大なことはないのである。

とあるように、讀書窮理の工夫においても、机上を離れた時にあつても、立志なくして真の修学はあり得ないのである。いたずらに知識ばかりが雑多で、人として恥を知らぬのは、「学んで思わざる」徒であり、「知行合一」と称しながら、讀書窮理の学問を廢し、「知」を軽んじて、ただひたすらに「直情径行」をもってよしとするのは、「思ひて学ばざる」の類である。いずれも、一齋の潔しとせぬところであるのは、言つまでもない。

『言志録』第六・七条に

学莫要於立志。而立志亦非強之。只従本心所好而已。(第六条)

学は立志より要なるは莫し。而して立志も亦之を強ゆるに非ず。

只々本心の好む所に従ふのみ。

学問は、立志といふこと以上に重要なことはない。そうして、立志といふことも、学問と同様に自発的であることが肝心で、無理強いしてできることではない。ただ、ひたすら自分の本心から好むことによつて、成し遂げられるのである。

立志之功、以知恥為要。(第七条)

立志の功は、恥を知る以て要と為す。

志を立てるための手立てとしては、人として恥を知るといふ

とあるが、人の人たる所以を「理會体認」するのが、讀書窮理（知言・集義）の本来の効用である。それは、天地宇宙の理（天理・道理）と一体化した気宇壮大な志を豎立し標置し不動とすることに心を注いで、はじめて成立するのである。

こうして、「言志」という文言について、一斎の本意の所在を尋ねていくと、「言志」とは「学思」であり、「知言持志」であるように思われる。典故は『論語』であり『孟子』である。「言志」は単に「志を言う」のではなく、学問と存養の両様一体の理念を述べた表現として見ると、一斎の学術のなお一層のスケールの大きさがうかがわれるように思われる。

注

(1)『孟子』の原文「勿正心（心に正^{ちか}ずする勿れ）」について、佐藤一斎は『孟子欄外書』に「勿忘」の伝写の誤として、次の「勿忘」との重複とし、この一節はもとは無かった文言と見てい

(2)佐藤一斎の所説が、士君子たるべき道を基調としていることは、『言志晩録』第八十九条の左の文言でも明らかである。なお、士君子とは、我が国では「武士」であり、士君子たるべき道が「士道」である。

凡為士君子者、今称武士。宜自顧其名以責其責、務其職以副其名。

凡そ士君子たる者、今は皆武士と称す。宜しく自ら其名を顧みて以て其の責を責め、其の職を務めて以て其の

名に副すべし。

おおむね士君子という者について、今日の我が国ではだれもが武士と称している。武士たる者は、士君子という言葉の意味を十分に思量してその実質を追究するようすすべきであり自分の職分を遂行して士君子の名に適うように努めるべきである。

*使用した「言志四録」の底本は、以下の通りである。『言志録』弘化三年板、『言志後録』同、『言志晩録』弘化三年板、嘉永三年後刷、『言志畫録』嘉永七年板。また、引用の訓読は、原本の訓点に従うことを優先したが、他に岩波文庫本『言志四録』を参照した。